

十二因縁と無我

十二因縁

四聖諦をおわかりましたから、今度は十二因縁のみ教えについて考えてゆくことに致します。

釈尊が三十五歳にして、菩提樹下に、仏陀としての正覚さとりを成就遊ばさるるや、強き真理の光に照らされて、一切衆生の流転まよひの真相を発見内観せられたのであります。その無明流転の相こそ、十二因縁であります。

我等に、最も直接せる「苦」は我等の上に現前する老であり死であります。「老死」こそは、我等の上から一切を奪うからであります。然らば「老死」は何故に我等の上に存在するのであるか。其処に釈尊は「生」を発見せられました。然り、生まれたが故に、老死その他一切の苦悩はあります。生まれて而して老死に至る、これ万人のまぬかるべからざる宿命であります。然れば、生まれるということは何故におこったか。

其処に釈尊は「有」を発見せられました。然らば「有」とは何であるか。有とは、善悪の業を造ったことである。「生」が果であれば業は因である。業以外に何ものもありません。業は我を生み出す力である。然らば「有」即ち業は何によつて生じたのか。

其処に釈尊は「取」を発見せられました。取とは何であるか。愛欲の煩惱が盛んにおきて、異性や名利を取り集めようとする事である。人と物と名に執着して、これを取り集めんとする貪愛こそ業をつくる因である。然らば何故に愛欲取求しゅぐの心をおこすのであるか。

釈尊は其処に「愛」を発見せられました。愛とは、愛着であります。人と物とに対する執着であります。この愛の恐るべき相が毎日新聞の三面記事として表れます。然らば、この愛着は何によつて生まれるのであるか。

其処に釈尊は「受」を発見せられました。受とは、感覚のことです。ものに感じ受け入れることであります。受け入れて、苦楽愛情の心をおこします。見るが故の恋であります。然らば何故に感受するのであるか。

釈尊は其処に「触」を発見せられました。触とは、色しき、声しやう、香、味、触、法の六境にふれることであります。色の美しさに、声に、香に、味わいに、体ざわりに、法もの（意の思ひ）にふれるからです。然らば何故に六境にふれ得るか。

其処に釈尊は「六処」を発見せられました。六処とは、目、鼻、口、耳、身、意の六つの窓を有つておられることでもあります。この六つの窓がなければ、我はありません。煩惱も迷いもありません。然らばこの六処は何故にあるのであるか。

其処に釈尊は「名色みやうしき」を発見せられました。名は精神、色は肉体、そうだ、ここに肉体があります。それに考える心があります。この肉体なかりせば、意のはたらきなかりせば、苦しみも迷いもありません。肉体あればこそ、食わねばならぬ、着ねばならぬ、生きねばならぬ。体はあつても、枯木や寒巖いしには悩みはないであろう。然れば肉体と精神の根本は何であるのか。

其処に積尊は「識」を発見せられました。識は一切を内含して、一切を生み出す根本、所謂「自我」そのものの本質であります。その蔵にも似たる識は何によつて成立するか。

積尊は其処に「行」を発見せられました。行とは、長き過去世につくれる善悪の業のことです。長き過去の行業の一切は消えず失せずして、識となつたのであります。然らばその識の根本は何であるか。

積尊は遂にその根本をつきとめて「無明」を発見せられたのであります。無明こそ迷いの根源であります。

三世両重の因果

今、更に十二因縁を順に観察してゆけば、過去世久遠の「無明」によつて業を作る位を「行」と云い、その行によつて母の胎内に宿り意識の初めて生ずる位を「識」と云い、母胎にあつて五陰（肉体と精神）の初めて成長する位を「名色」と云い、やがて月満ちて、六根円満にとつて母胎を出る位を「六処」と云い、やがて生まれて二三歳になれば盛に物にふれんとする位を「触」と云い、五六歳以後、苦楽愛憎好醜を見分けする位を「受」と云い、十五六歳以後男女愛欲の念の生ずる位を「愛」と云い、三十前後愛欲盛んに、人と物とを取求活動する位を「取」と云い、かくて愛欲財欲等の煩惱によつて業を造る位を「有」と云い。有とは、未来の果を有するが故にとよぶのである。かくて又更に未来の「生」を受けて「老死」を繰り返すのであります。今これを三世に配当して表示すれば、

無明	………	惑	
行	………	業	過去の因
識			
名色			
六処	………	苦	現在の果
触			
受			
愛	………	惑	
取	………	業	現在の因
有	………	業	
生	………	苦	未来の果
老死	………	苦	

古来十二因縁をかくの如く観察して三世両重の因果と申します。つまり、惑（無明）業を造り苦を受ける。惑、業、苦の連続無限が凡夫の生死流転の一切であります。

積尊は、この十二因縁を順に観じ、又逆に観じて遂に仏となられたのであります。然し、それは唯事実として見られたと云うのでなくて、その背後には、久遠の法身が、

来たつて積尊となり、その光明が又、十二因縁の無明の一切を迷いの事実として批判し判断して、この迷いより積尊を解放したのであります。

即ち十二因縁を内的生活の客観的事実として感ずるといふからには、そこにそれを感ずる、真生命、真主観がなくてはなりません。その真主観こそ、積尊自身となれる、久遠の法身、即ち仏であります。積尊も亦、この如来の帰命せられたのに外なりません。

ですから、唯単に、如来や自覚をぬきにして、十二因縁を時間の上にならべただけでは何等の意味をもちません。どこまでも、自覚における一心の相、その現前の自己の分解であり内観であつて一念に三世に徹する自覚の相であります。

十二因縁は生死流転の衆生の相であり、事実であります。即ち虚妄の迷いの因果であります。四聖諦で云うならば「苦」「集」「二諦にあたります。この迷いの因果に対して「滅」「道」が悟の因果であることは、前によく述べた所であります。滅、即ち涅槃のさとの輝く所、其処に「道」は生死海にあらわれます。積尊は涅槃をさとり、道に生きてはじめて、十二因縁を順に、逆に観じて、根本の「無明滅すれば行滅し、行滅すれば識滅し、識滅すれば………老死ごとく滅す」と十二因縁の支配より解放せられて、ここに正覚成就されたのであります。然らば一体、この十二因縁の諦観は、我等の生活と如何なる関係を有するのでありましようか。

小乗と大乘

積尊は、積尊になりきりつつ、しかも積尊を批判する法身の光によつて、衆生の流転の相を十二因縁として諦観されました。無明に出発して老死におわる三世の因果を内に観ぜられたということは、積尊が惑業苦の束縛を解脱し、超越せられたことでもあります。然れば、その解脱とは如何なることを意味するのでありましようか。ここに我等は二つの意味を考へることが出来ます。

第一は、積尊の自覚とは、この十二因縁として現されたる悪業煩惱が全てなくなつたのだという考え方であり、第二のそれは、決して悪業煩惱を無くされたのではなくて煩惱そのままに、法身によつて生かされたのだという考え方であります。

第一の考え方をとれば、我等が道を求むることも亦煩惱を無くすることである。涅槃を又寂滅といいますが、寂滅するとは、煩惱の無に帰した相ということになります。従つて、煩惱の無くなつた積尊は、唯、衆生済度の伝道のためにのみ生きられたということになります。この考え方が所謂、小乗の思想であります。

第二の考え方は、所謂大乘のそれでありまして、煩惱即菩提、生死即涅槃等の言葉が表すように、法身の光によつて業を諦観するということは、業から解放されることであつて、決して無くなることではない。寂滅ということも決して煩惱を逃避したり、無くしたりするような、消極主義ではなくて「心を師とすること勿れ、心の師となれ」といふ言葉が表すように、悪業煩惱に対して、超越的高次の立場をとつて、煩惱に使われた生活が煩惱を使う生活、苦に殺される生活から、苦を甘露として生かす生活へと転換することこそ、解脱であります。然ればかかる解脱を得るには何がその因であるかと言へば智慧であります。智慧の有無こそ、我等が業に縛られるか、業より解脱

を得るかの、鍵をにぎるものであります。而して智慧が法身そのものである以上、如来なくしては解脱はあり得ない。しかも如来は、衆生なき世界、言いかえると生死即煩惱悪業のなき世界には無意味であります。これを逆説すれば、如来の智慧光のみが、衆生に内観を強いて、十二因縁の業感ぜしめるのであります。業には業を業と感ずる力はありません。従つて如来を観ずる以上、業を内観せずにはいられない。であるから業をなくするという考え方は無意味であります。

常に煩惱あるが故に、この業を如来の光明の裏に諦観しつつ、不断に自利し、利他するものが大乘の菩薩であります。煩惱あるが故に、不断に求道せずにはいられない道を獲得が故に利他しなければおられない。かくして永遠に、彼岸を憶念しつつ衆生界に働きかける処に大乘菩薩道があるのであります。然るに、小乗の声聞は自利を知つて利他を忘れ、独覚は自己の悪業を忘れて、利他のみ生きようとするものであります。

釈尊も亦、真理の光によつて、十二因縁を諦観して、その束縛を脱し、法身を自己として自証されましたが、それは徒に生死と隔離されたる消極的な涅槃を求められたのではないということを知らねばなりません。

二種深信

さてこの十二因縁の諦観が、浄土真宗に於いては如何に現れて来るのでありましようか。善導大師の有名なる二種深信がそれであります。

「一には決定して深く、自身は現に是れ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来常に没し常に流転して出離の縁あることなしと信ず。」

二には決定して深く、彼の阿弥陀仏の四十八願は、衆生を摂受して疑いなく慮りなく彼の願力に乗じて静定んで往生を得と信ず。」

一は機の深信であり、一つは法の深信であります。機の深信が徹底して、我が身は現に罪悪生死の凡夫、(過去)曠劫よりこのかた常に没み常に流転して、(未来永劫)出離の縁あることなしと自覚ある処に、如来本願の摂取不捨は、疑いなく我等のものとなります。しかしかかる自力無効の機の深信は、阿弥陀仏の智慧光なくしてはおこつて来ませぬ。如来によつて、小我のはからいを打ちくだかれ、如来のみ生きてゆく、純粹なる如来の願力の然らしむる所であります。如来の願力はそのまま衆生になりきつて、純なる願生心、即ち大信を成就して流転の根本たる疑惑を打ちくだくと共に、限りなく衆生を批判し、内観せしめて、罪悪生死の悪業を超越せしめるのであります。ここに念仏の無碍道は我等の前に開かれるのであります。

十二因縁が三世にわたる自覚であつたように、この機の深信も亦信一念における三世の深信であります。

人生の基調

南無阿弥陀仏は、全一至純なる絶対価値であり、大生命であり、金剛不壊の大信心であります。

この全一なる如来を、全一なるままに惑わず、我等の上に生活するもの、これ即ち眞実の宗教であります。

しかも如来の本願力は、小我の一切のはからいを打破して、人生ありのままを生かしていきます。

ここに初めて法界は、洞然として一ぼうにりきじねん法爾力自然の顕現として承認せられて、惑うことなく、強く、明るく、喜びに充ちた生活が始まるのであります。久遠の業障ごつしょうは、そのままこれを超越するのであります。業を業と知らずして、どうして業を超越することが出来ましょう。業を超越するとは、よく業に随順することであります。

人生を逃避せず、煩惱を逃避せず、苦悩を逃避せずして、よくこれに随順するが故に、よく超越するのであります。生きるのは如来であり、生かされるのは、煩惱悪業であります。

この他力の無我大信の生活こそ、人生の基調であり、人間性格の全体であります。